

昭和十年前後の「偶然」論

— 中河与一「偶然文学論」を中心に —

一 中河与一の「偶然」論の位置

昭和十年前後に中河与一を中心に繰り広げられた「偶然」という言葉をめぐる議論は、同時代の横光利一の「純粹小説論」（昭和一〇年四月、『改造』）や小林秀雄の「私小説論」（昭和一〇年五月『八月、『経済往来』）をめぐる議論に比して、現在、文学史の問題として扱われることが少ない。しかし、それは当時、後二者に決してひけを取らない重要な問題圏を形成していた。本論の巨視的な目的は、当時、狭義の「文学」を超えてあらゆる分野にわたって検討された「偶然」という語を鍵語として、従来とは別の角度から昭和十年前後をトータルな形で捉え直すことである。本稿においては、先ず中河与一の議論を中心に、問題の所在を明確にしたい。

中河与一の当初の趣旨は極めて単純であった。すなわち、当時の

真 銅 正 宏

文壇は、私小説がリアリズムを曲解ないし局部肥大し、作家の身辺と日常生活を描くことばかりになり、創造性が希薄になってしまつた一方、プロレタリア文学は、弾圧という外からの力と、小説とその目的意識とのレベルの混乱により行き詰まつた状況下であり、これらを打破するには、前者のリアリズムの極北としての「必然」性と、後者の背景にある歴史観からくる「必然」性を、ひとまとめに「必然」として捉え、この「必然」なるものが当時の文壇の限界状況の要因であるとし、その反意語である「偶然」的要素が要ると考えたのである。ここにはもちろん論理の飛躍が窺えるが、同時代的には問題の核心を突いた議論と受け取られても不思議のないものであった。周知のとおり小林多喜二の虐殺と、共産党のリーダーであった佐野学と鍋山貞親の転向声明、および滝川事件など、日本のファシショ化の最初のピークがあったのが昭和八年である。

一方、いわゆる私小説作家らしい私小説作家は、嘉村礒多を除き當時ほとんど活動を停止していた。この状況をまとめて「必然」という要素の衰退と呼ぶことはたやすい。この同時代の文学の危機的状況の打開策として、「偶然」という言葉を一種のスローガンのように用いたのである。それは正しく中河にとつての「文芸復興」の合言葉であった。

ところで、「偶然」についての議論自体は中河与一以前にもあったようだが、いわゆる「偶然文学論争」として、昭和十年という年になりに集中的な論争を引き起こす直接の引金となったのは、同年二月九日から一日まで三日間にわたって連載された、中河与一の「偶然の毛鞠」という文章である。この文章に触発された各分野の論者たちが、「偶然」と「必然」の陣営に分かれ、旺盛に議論を戦わせることとなる。またそれに答える形で、中河与一自身も論を深化していった。その一応のまとめとして、同年七月の「新潮」に発表されたのが「偶然文学論」である。これもかなり反響を呼んだ。そしてその反響へのさらなる対応をも含め、中河は、自身の偶然に関する一連の文章を『偶然と文学』と題して同年一月に第一書房から刊行する。さらにこの本は様々な形で版を重ねていった^①。

さて、この『偶然と文学』が刊行されると、さらに書評がいくつか集まった。これらは同じ第一書房から、長谷川巳之吉編輯発行と

して、実際には中河与一自身の編輯により『偶然と文学』批評集としてまとめられた。非売品であるが、刊記は昭和十一年三月一日となつている。

この間、すなわち、中河与一の「偶然の毛鞠」の連載の始まった昭和一〇年二月九日より、翌十一年三月一五日までを、本稿の一応の射程範囲としておきたい。

一 偶然文学論争

「偶然の毛鞠」においては、先ず、現今の小説を改革するという企図が強く語られている。これは、二ヶ月後の四月に発表される横光利一の「純粹小説論」と同じ問題意識であり、さらにそれを「偶然」という要素を用いて解決しようとした点においては「純粹小説論」を先取りしているとも云えよう。中河は次のように述べる。

それは単にマルクス主義作家のみならず、ひとしく芸術派と称する作家までが、必然論といふものに何の疑ひもさしはさまなかつたのである。斯くて吾々の文学は明らかに不思議といふものを喪失してしまつた。日常微温の小説に専念し、觀念の絶望に耽溺し、創造的氣力を見失つてしまつた。もともと必然思想といふもの、中に不思議といふもの、存在のしやうがないからである。

(「偶然の毛鞠」(一))

つまり、先に述べたとおり、当時の具体的な文学思潮としてのマルクス主義文学と芸術派文学の、どちらをも蹴散らす際に、その「必然」的性格を挙げて攻撃するのである。そしてその反対物として「偶然」が語られる。

同じ文章のなかで、フランス文壇の現今を紹介して、「ジイド」を中心に、「フェルナンデス」や「クルチユウス」などの文学論が、「ベルグソン」の「偶然」説、すなわちここで云う「流動哲学」と「創造的進化」という、非決定論的な哲学の考え方をもとに組み立てられているとも述べている。これらを借りて「偶然」論の補強乃至証明に充てているのである。

さらに、その自己の論の補強乃至証明のために、最新の科学理論をも持ち出すこととなる。具体的には「ハイゼンベルグ、ボルン、ヨルダン等」の「波動力学」における「非確定理論といふもの」である。初出ではこのとおりの言葉であるが、単行本においてそれは「量子力学」における「不確定性原理」と改められている。この変化は、おそらく石原純の示唆に基づくものであろう。四月一日付の『東京朝日新聞』の「偶然論と文学」(二)において石原は、「中河氏がそのなかにおいて語られた科学における偶然論は不幸にして必ずしもその正当な意味においては解されてゐなかつたことを甚だ遺憾としなければならぬのであつた」「その内容の不正確さに対しては、

私は科学理論の厳正なることを知る限り、一層これを悲しみ、且つこれを平気に見道がすわけにゆかないのである」と述べている。要するに用語が曖昧であった。そして中河も石原の言を受け入れ、九月ほどの単行本において出来る限りこれを改めている。初出からの違いが目立つところは以下のとおりである。

彼等はいふ「人智には位置と速度とがある。而も位置と速度とは同時にあり得ない。」(略)

非確定——偶然とは確かに吾吾にとつて一種の苦悶であるに違ひない。だが「非確定を自然の真相として寧ろこれを受け入れるところに現代がある」とエディントンは批評してゐる。又「非確定理論は、相対性原理を更に越えるところの廿世紀の科学上における一大創見である」と説明してゐる。

(二月十日、『東京朝日新聞』、傍線引用者)
彼等はいふ「電子の有様は位置と速度とによつて与へられる。しかも位置と速度とは同時に確定しない。」(略)

不確定——偶然とは確かに吾々にとつて一種の苦悶であるに違ひない。だが「不確定を自然の真相として寧ろこれを受け入れるところに現代がある」とエディントンは批評してゐる。又「不確定性原理は、相対性原理を更に越えるところの二十世紀の科学上における一大創見である」とも説明してゐる。

(十一月十五日、第一書房、傍線引用者)
 右のとおり、初出においては、元來量子力学の用語であり、電子について語られていたものを、いきなり人智に關わるものに敷衍して述べている。このことがあまりに論理を飛躍し逸脱していることを指摘されたのであろうか、これを単行本においては穩健な表現に戻している。これが最大の改変で、さらに中河自身が「偶然論の訂正」(同年四月八日、『東京朝日新聞』)という文章を発表して、初出の文章が他人の論の引き写しであったことを認め、量子力学に限定する方向に戻すことを述べている。また次のような改変も重要である。

現代の物理学は数理に基礎を置いてゐる。そして「幾多の意識を以て描かれたる自然は結局単なる数字に化してしまふ」。

然しその数字の根元が「確率」と「偶然」とにありとすれば、数は数としての本質がなくなつたわけではないだらうか。デイヤックは数の本質をP数と名づけ、P数は実数でないとしてゐる。「神は整数を造り、その他は人が造つたものだ(クローネカー)物理は畢竟心理である」

してみると、今や吾々の世界では客観といふものが主観に接近し、偶然論において烈しく密接しようとしてゐる事に気付くのである。(二月十一日、『東京朝日新聞』、傍線引用者)

現代の物理学は数理に基礎を置いてゐる。そして「描かれた

る自然は結局単なる数字に化してしまふ。」然しその数字の根元が「確率」と「偶然」とにありとすれば、数は数としての本質がなくなるわけはないだらうか。デイヤックは数の本質をQ数と名づけ、Q数は実数でないとしてゐる。(神は整数を造り、その他は人が造つたものだ)(クローネカー)。物理は畢竟心理である——。
 ここまでいふと、それは明らかに混同である。だが今や吾々の世界では客観といふものが主観に接近し、偶然論において烈しく密接しようとしてゐることに気付くのである。

(十一月十五日、第一書房、傍線引用者)

このP数とQ数の書替えは一見何でもないようだが、Q数とは量子力学の量子(quantum)の頭文字からきたもので、一般的にこの言い方を用い、P数は通常運動量を示す際に用いられるもので、物理学を少しでも知る人間にはその意味の相違は明らかであるといふ^②。仮に譲つてこれを専門用語的な改変として許容したとしても、後半の改変は、初出の中河の文章がいかに獨断的な書き方であったかが窺える。極論に過ぎた点が穩やかな表現に変えられているという程度ではなく、順説表現を逆説表現に変えても、そのあとに続いていく言葉は結局同じという、決定的な論理のすり替えが窺えるのである。それは自己の「偶然」論に科学的な根拠を得るために、性急な証明を試みた結果であらう。

のちに「文学と科学の結婚」と称された中河与一理論の眼目の一つが、この科学理論の応用にあつたことは確かである。彼は、好意的に批判を加えた石原純と、こののち手を結び、同じ側に立つて、他の批判者に立ち向かうことになる。第一書房版の単行本のこの論文の最後にも、「文中、物理学に関する部分は誤りなきを期し石原純博士の校閲を得た」という文章が加えられている。しかしそれは全的に科学的なものではなく、新しい挑戦のためのややあやふやな応用であつた。

また彼はこの文章のなかで、「偶然」の必要性を文芸思潮上のリアリズムとロマンチズムの関係の問題にまで敷衍する。従来対立項として扱われてきたこれら二つを、今や結びつける必要があるとし、そのためには「偶然」が媒介しなければならぬとするのである。リアリズムは、あたかも現実そのものを写すことのように扱われてきたが、それはリアリティーという問題に移すべきであり、たとえ空想の世界でもリアリズムは成立し得る、といったことを積極的に述べたてようとして、ロマンティズムと共存し得るということにするのである。これは、自らのマルクス主義と芸術派の文学への批判に対応し、攻撃するばかりでなく、それらを発展解消させるべく、その一応の具体的方策の見解を述べたものである。

さて、このような文章に対して、賛否さまざまの意見が寄せられ

た。その批判者の代表的な意見は次のようなものである。

果して「純文学」は、偶然性を排除し、「必然性でかためてゐる」ために退屈におちいつたと言ひ得るだらうか。「一体純文学もプロレタリア文学も凡そいかなる文学も、偶然を排除して成り立ち得たためしがあるだらうか。否だ。純文学は、むしろ歴史の一般的進行にとつて本質的な意義をもたぬ個人の偶然的な生活をのみ、偶然なま、に描いてきたためにこそ無力化したのだ。」(略)

こゝでは、中河与一氏がマルキシズムは必然論だ、と片付けて居たことに対して、一言つけ加へておきたい。この世界の森羅万象はたゞ必然的なものだとのみ説き、その必然が現はれる特殊な形式である個々の偶然性の客観的意義を抹殺するのは、いはゆる機械的唯物論や或種の観念論であつて、マルキシズムではない。

(略) 私達は偶然性の客観的意義について、たとへば、プロレタリア文学の運動にとつて個々の作家の親ゆづりの性質は偶然的なものだと認めるが、その発展の仕方の中には必然的なものを認めるし、また作家の偶然的な個性が、文学運動全体のみで必然的な役割を果して来たし果し行くことを具体的に認めるのである。(森山啓「小説論における必然と偶然」昭和十年五月、『文芸』、傍線引用者)

これはマルクス主義の立場からの反論の典型的なもので、「マル

キシズム」と「機械的唯物論や或種の觀念論」とを區別することを求め、純文学衰退の原因も、「必然」に拠るのではなくむしろ「偶然」的要素に拠るとする、中河理論のかなり根本的な否定である。森山によるとマルキシズムは「必然」ではない。つまり二重の意味でマルキシズムは中河の批判から自由であるとするのである。

また別に、次のような反論もある。

文学の通俗性（乃至純粹性）の問題では、必然と偶然とのたゞの対立ではなくて初めからその関連が主題にならざるを得ない。之は一般の偶然論の立場から云つても、稍々進んだ形態の問題だといふことを注目しなくてはならぬ。処がロマンティズムの問題から提出される偶然論は、全く、偶然を必然から分離すること自身に興味を持たざるを得ないやうだ。こゝでは必然性との内部的な連関が興味ではなく、必然性が如何に偶然といふ、或ひは又可能性・自由其他といふ、剰余を残すかといふことが、興味の中心であるやうに見える。ロマンティズムがリアリズムと対立する限り、即ちリアリズムの立場と対立するロマンティズムの立場を守り又主張する限り、リアリズムの原理と考へられる必然性、ロマンティズムの原理と考へられる偶然性とが、單純に排他的に対立せざるを得ない。こゝでは偶然論は、必然主義と思しきものに対立する偶然主義に帰着することになる。そこでハイゼ

ンベルクの不確定性の原則などが証人に引き出されたり何かするのである。

（戸坂潤「文学に於ける偶然性と必然性」昭和十年六月、『文学評論』、傍線引用者）

この論では、直接的には横光利一の名が挙げられるだけだが、引用文のハイゼンベルク云々の内容からも明らかなように、批判対象としては中河与一が暗にその代表として設定されている。おそらく彼の論が公式的に解されやすかつたためと思われる。それは、偶然論は必然性を排除するための、いわば議論のための議論に過ぎず、内的な理由はそれほど大きくないといった批判である。

さらに、内容はかりでなく、中河の論法に関する批判もある。

——（偶然論は中河与一氏などによつて文芸理論一方の旗幟とされようとしてゐる。中河氏はひとり思想家の文章からだけでなく、科学者の言説の中からも、自己に好都合な部分を引用し、自己の主張を固むるに懸命であられるやうだ。しかし作家としての氏が如何に優れてゐようと、文芸の形而上学者としての氏を尊重する気にはなれない。思ひつきはよいとしても、論証の過程は今のところ腹立しいほどの杜撰さである。それなのに他説、特にマルクス主義に対する無理解を臆面もなく押しつけようとされてゐる。少し思想の流れに注意してゐるものな

ら、偶然論、特に自然科学におけるそれがどの方面から思想的に注目されたかを知つてゐる筈である。自然弁証法の問題なども、これを繞つて討議されたことを、中河氏は御存じないのであらうか。(略)

(本多謙三「誤謬・偶然・運命―知識者問題の実存的理解(下)」昭和十年六月十日、『帝国大学新聞』、傍線引用者)

これは、中河の論の手續き上の問題点、論証の杜撰さを攻撃するものである。この論からも、当時の中河の理論がかなり独善的と映つていたのであらうことが窺える。理論を重要視するマルクス主義陣営からは、特に強い反発を受けたというのもうなづける。

以上が反論の代表的なものである。要するに、「必然」につくか「偶然」につくかの立場の相違からくる反論、さらにはそれを主義的にスローガ的に述べようとする中河の態度に対する反論、またその際の手続き上の問題点への指摘が、対立する側の主たる論点であった。これをふまえて中河は批判への批判を提出する。

その際中河は、徐々により精密に理論武装し、同年七月の『新潮』に満を持して「偶然文学論」を発表した。この文章をめぐつてますます賛否喧しくなるが、その原因の一つとして、この文章の一種のマニフェスト的な性格を想定できる。ここでも彼は次のような主張を繰り返している。

私は今にして、今日の文学が、何よりも這般の驚きを失つて、全部の人が全部、安心しきつて必然思想にのみ憑かれてゐる事に、何よりも危険を感じる者である。(略)

古往今来、誰れが芸術を計算の中から割りだした男があるだらうか。俳句の如き短詩形さへも、吾々は如何なる数字の組合せによつても制作し得ないのである。

そしてさらなる段階として、これを芸術に限つた問題ではなく、世界観の問題としても敷衍していく。

吾々は吾々の芸術に於て、心臓を、生活を、社会を、再び偶然の事実によつて見なほし、生き生きとそれを感じ、蘇生せしめなければならぬ時代に到達した。(略) 未来を空想して現実を切実に生きるもの、それは恋人達だけではない。偶然の論理に於て吾々は初めて未来と現実とを豊富に生き、吾々の日常を永遠になぐるのである。

これは文学の中に於ける空語ではない。取つてつけたやうな社会的関心と現象論と文体論にもまして、最も深奥なる文学精神の根本にさかのぼらうとするものである。(略)

今日の論理を築く事の困難と得失とは誰れしも知つてゐる。然も私は敢てその無謀をした。今は荒廃したエピクロスの園に這入つて、美を愛する喜びを再興したい。私の論理は粗草に刺され、

棘に傷つけられた。然し私の開墾はまだ一日の忍耐にも達してゐない。(昭和十年五月卅日)

ことの当否はともかく、彼をこれほどまで昂ぶらせるほど、当時の「必然」論も根強かつたようである。またこのことから、この「偶然」および「必然」の論が、昭和十年前後にさかんに議論された、あるべき小説像をめぐる問題、及びその背景に認められる世界観の相違の問題を鋭く突いていたことを示しているとも考えられる。「必然」と「偶然」という言葉は、あたかも代理戦争を演じたようなのである。そしてもしそれが事実ならば、この論争は、文学史的な扱いの上で不当に無視されていると云わざるを得ない。

三 小説作品の虚構性と「偶然」性

以上のように、「偶然」と「必然」は同時代の文学状況の問題点を抽象的に指し示した言葉であることは明らかであるが、ではいったい、小説作品における「偶然」とは、具体的にはどのような形で提出されるべきなのであろうか。この肝腎の問題について、中河批判の急先鋒の一人であつた三枝博音が次のように述べている。

極めて一般的に言つて、小説はそれが面白いといふことを通じて、読者を感動させ啓発させるところに、小説の存在理由があるといふことができる。面白いのはいつたどうして面白いのか。

自然や人事についての精密な単なる記述や記録(例へば未開地踏査記とか工場監督官報告など)が小説のやうに、面白くないのは、それがはじめから人を感動せしめるやうにできてゐないからである。感動せしめるやうにできてゐないのは、その記述物の仕組如何にある。小説ではこの仕組のところに、感動せしめること的主因がひそんでゐる。小説で偶然が問題になるのは、この仕組のところに於てである。(略)(今更物理学者の説など引き合ひにして)現実には偶然で充ちてゐるから、従つて偶然が支配する面白い小説が大いにこれからもあり得るといふやうな(この頃流行の)小説論は、小説は何であるかを理解してゐない以上に、吾々の時代の現実を理解してゐない愚論である。

(三枝博音「小説の「偶然」の分析」昭和十年八月、『経済往来』) またしても中河与一の論が、その名を挙げずに批判されている。横光利一が同じ論のなかで、否定はされるが好意的に論じられてゐるとの好対照である。

この文章によると、中河与一の「偶然」論は、すでに小説の範囲を超え、現実世界に「偶然」が満ち充ちていて、それを写すのが小説である、というように理解され、議論が小説外の「偶然」の方に重点を移したように解されていたようである。そこから中河の「偶然」論は、神秘主義的に扱われることとなる。またそれを否定する

ために持ち出された科学理論としての「不確定性原理」にしても、小説からは遠く離れたものという扱ひを受ける。三枝はとにかく議論を小説に限ろうとする。「さて、偶然は創作のなかの問題である。といつて、藪から棒の偶然が、小説を芸術たらしめるのではない。必然的な法則的な玲瓏たる認識へもり上つてゆくための偶然でなければならぬ。」という言葉も、この大前提から導きだされる。つまり三枝は「偶然」の上位項目として「必然」があればこそ「偶然」が生きる、という結論に達しているのである。

これに対し翌月の『経済往来』で中河は次のように述べている。即ち三枝氏によると「偶然」といふものは小説を面白くするための単なる手法、小説内の事だといふ事になるのである。してみると三枝氏に於ては、小説を面白くするといふ事が同時に「小説の本質論」になるのである。誠に恐れ入つた本質論である。(略) 私は三枝氏の「偶然論」などは小説にとつて有害無益の技巧論にすぎないと思つてゐる。三枝氏のいふやうな「偶然」なら、今日の通俗小説をみれば、実はありすぎて困るのである。そんなものが今更ら小説にとつての新らしい論理などであつてたまるものではない。

(中河与一「偶然文学論の深化」、昭和十年九月、『経済往来』)
対立点はあまりにも明らかであるが、ここで注目すべきは、中河

与一にとつての偶然が、いわゆる「通俗小説」の通俗的設定のそれとは一線を画すべきものとされている点である。ここで問題は、横光利一の「純粹小説論」とも一度切り結ぶ。すなわち、「通俗小説」とは一体何か、という根本的な問題がそこに再び登場してくるのである。単なる、或いは卑俗的という意味での「通俗小説」は、やや観念的ではあるが、横光によつても中河によつても、同様に否定されている。しかし、同じ「通俗小説」というジャンル名の中で、それらの厳密な区別が困難であることは云う迄もない。したがつて、本来ならばここで両者は、「偶然」を「通俗小説」の属性とする前提自体から問い直さなければならぬのであるが、残念ながらその議論は為されなかつた。

またこれも典型例であるが、中河のものはまったく因果關係を認めない、という誤解をも呼ぶ。例えば萩原中は次のように述べる。因果概念を棄却すれば、残るのはただ数の世界だけで、芸術も何もありはしない。「計算」(確率)から芸術が割出せないとすれば、無原因(偶然)から芸術が創造されるかどうか。何等の因果連鎖のない小説。僕は中河君の小説を読んだことはないが、いかに中河君でもさういふ小説を書いてはるまい。もしさういふものがあつたとすれば、それは没落を前にした階級の、狂気の表白でしかないであらう。

（萩原中「偶然文学論への応酬」、昭和十年十月、『文学評論』）

もちろん中河がそのような小説を想定しているわけではないことは云う迄もない。この萩原の文章からは、議論が、世の中には因果概念があるのかないのか、といった極端に走っていたことが窺える。

このような意味においては、この議論は我々に何の利益ももたらさない。我々にとって意義があるのは、「偶然」という言葉によつて論じられようとしていた、小説概念の基本、おそらく、虚構というものゝの性格、それをめぐつての議論展開である。したがつて、「偶然文学論争」は内容的にはなく、あくまで目的論的に問うべき論争であつたと結論づけられる。

小説が虚構であることの根本に関わる、小説作法上の「偶然」性の問題は、時代を超えて、全ての虚構作品に拡がり得るものである。例えば森鷗外の「雁」の主人公岡田は、僕の夕食が「青魚の未醬煮」であつたという「偶然」から、お玉さんと最後まですれ違つてしまう。さらに、雁を逃がすために投げられた石は「偶然」にも雁に当たつてしまう。この小説において「偶然」が重要な位置を占めることは明らかであろう。これは小説における「偶然」の一般的な問題であるといえる。次に、昭和十年前後に特有のものとしても、この問題は重要な意義をもちうる。なぜなら、小説の方法論自体が積極的に論じられた時期であることを傍証するからである。両者の

交点として、中河の「偶然文学論」をめぐる一連の言説を位置付けることができる。ただし、この「偶然」の問題は、のちの時代には展開していかなかった。そこには、一旦は取り入れられた、科学や哲学と文学との間で学際的により発展する可能性を秘めた「偶然」論が、結局はやはり、学問上のセクト主義により、区分されてしまふ様子^①が強く感じ取れる。一方では、文学は特別だから科学とは違ふ、という理由、もう一方では文学者は科学的知識には無知だから科学のことは借り物でしかない、という理由である。

「偶然」論は、このような枠組みの変化についてもさまざまのこゝとを示唆してくれる。それは、文学史の問題であるだけでなく、文学史において「問題」がどのような仕組みによつて作り上げられていくのかを探究するに際しても、重要な例を示してくれるのである。

注

① 普及に入つただけでも、昭和一八年一月、人文書院刊の「偶然の問題」（刊記には「偶然論」とある）や、昭和二九年六月、角川書店刊の「非合理の美学」も、所収作品の出入りはあるものの、主要な論はずべてこの時期の偶然文学論関係のもので占められていて、実際にはこの「偶然と文学」の再版的出版にすぎない。

② 物理学者の日置善郎氏（徳島大学）に御教示いただいた。

※ お本稿は、一九九五年六月一日、同志社大学で行なわれた同志社大学国文学会で口頭発表したものに加筆したものである。